

## ご 挨拶



会長 恵美 公二郎

近年、西洋医学の著しい進歩により、我国の生後1年未満の乳児死亡率は0.3%と極めて低く世界最低となりました。加えて、わずか1000gに満たない超低出生体重児の救命率は高くなっております。

しかし、厚生労働省による超低出生体重児の3歳時点の2005年の調査結果では、言葉の遅れ、歩行困難、視力障害等の異常が19.6%で見られ、正常か異常かの判断が難しい境界の幼児は18.2%もあり、10年前と比較すると、どちらも5～8%増加しています。学童期に至らないと明らかにされない注意欠陥多動性障害(ADHD Attention Deficit, Hyperactivity Disorder)、学習障害(LD Learning Disabilities)等を含めて考えますと、成長していく過程でまだ多くなることが推測されます。このような小児が発育していく上で、原因が明確でない症状に対し、その機能回復に鍼灸治療が果たす役割は益々大きくなるのではないのでしょうか。

2006年の文部科学省による各年齢層における体力テストの結果によれば、小児の体力は著しく低下しているとのこと。パソコンは各家庭にまで普及し、子供の頃からインターネットを活用し、テレビゲームで遊び、最近では、屋外ではしゃぎ回る子供たちを見かけることは少なくなったことから推測できます。こういった現状を認識することが、私達の臨床に繋がるものと考えられます。

この度の第1回日本小児はり学会学術集会では記念講演として情報通信分野での第一人者であります大阪大学前総長・宮原秀夫先生に「西洋医学と東洋医学の融合～情報通信の光と影～」のテーマで、膨大する情報が子供たちの健康に与える影響を中心にお話して戴きました。先生ご自身も小児はり治療の体験者であり、また、先生が総長をされておられた大阪大学の医学部附属病院には全国に先駆けて鍼灸を取り入れた補完医療外来が2005年に開設された経緯もあります。このように公私共に東洋医学へのご理解を賜っている科学者ならではの講演であったと思いますし、当日ご参加下さった沢山の先生方からも絶賛されていたのが大変印象に残りました。

また、開会式には、神戸大学名誉教授・兵庫鍼灸専門学校長伊東宏校長にもご臨席賜り、そのご挨拶の中で、「鍼灸医学は、臨床医学であり、そのためには実技の重要性を忘れることなく、日本独自の小児はり世界へ発信することを目標に本会の発展を願う」とのお言葉を戴きました。このお言葉を励みに、今後、さらに若い世代への継承を図り第2回、第3回と末永く継続していきたいと願っております。

さて、今年は、大阪に場所を移します。森ノ宮医療学園の全面的なご協力を得て、「スクスク育つ子供のために」を第1回からの継承テーマとし、「小児の心の発達」を考えます。学ぶ、知ることから始め、小児の健やかな成長に我々が如何に寄与できるかを模索し、努力することによって、世界の子供の健康に貢献できるのではないのでしょうか。

本会を皆様と共にさらに発展させていくことをお約束して冒頭のご挨拶と致します。